1　京田辺市トヅカ古墳出土遺物の再検討

諫早直人・馬渕一輝

1．　はじめに

トヅカ古墳（十塚古墳）は木津川左岸、京田辺市飯岡の独立丘陵の東端に築かれた直径約25mの円墳である。最も高いところで標高67mをはかるこの独立丘陵上には、墳長約86mの前方後円墳である飯岡車塚古墳を筆頭に、直径約60mの円墳であるゴロゴロ山古墳（茶臼塚古墳、市指定文化財）、直径約38mの円墳である薬師山古墳（桜井王古墳、市指定文化財）など、古墳時代前期後半から中期にかけての古墳が点在し、飯岡古墳群と呼ばれている（図１）。京田辺市域（旧綴喜郡西部）において最も長期にわたって営まれた首長墓系列であり（和田1992）、南山城地域の古墳時代を考える上で欠くことのできない古墳群といえるが、その実態については明らかでない部分が多い。

トヅカ古墳は、もともとは付近にある咋岡神社の所有地であったが、1876年（明治９）に

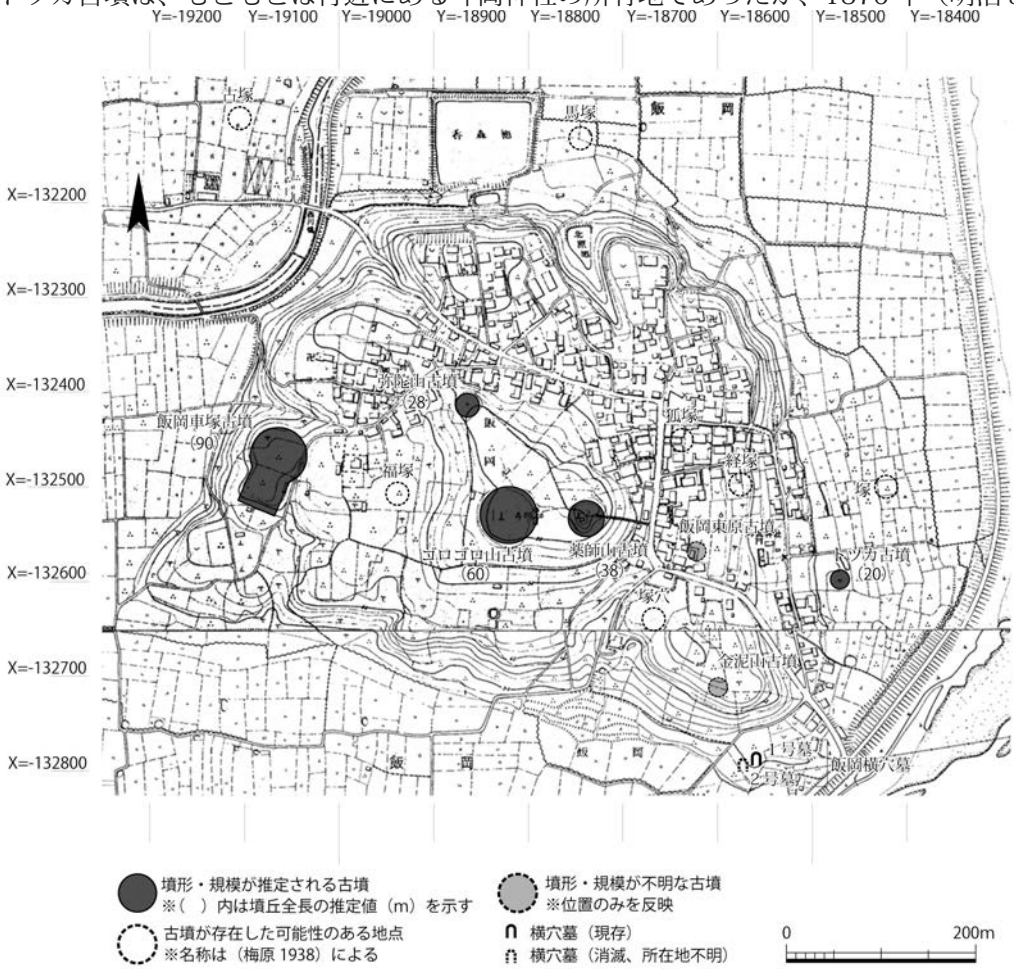


図１　飯岡古墳群分布図（S ＝ 1/8000）

払い下げを受けた住民によって開墾の際に発掘され、墳頂部に設けられた竪穴式石室から銅鏡３面、馬具、刀剣、各種玉類が出土した。出土遺物の大部分は、京都府博物館（1875-1883年）を経て、現在、京都国立博物館の所蔵となっている。銅鏡が３面出土したこともあって戦前から知られた古墳であったが（岩井 1905、梅原 1920・1938）、片岡肇によって当時の行政文書が詳細に検討され、発掘後の遺物の取り扱いや古墳の保存に至る経緯が詳細に調べられている（片岡 1991）。

今回、京田辺市史編さん事業の一環で、京都国立博物館が所蔵するトヅカ古墳出土遺物について悉皆調査を実施した。調査は京都国立博物館の全面的な協力のもと、諫早直人と馬渕一輝（京都大学大学院文学研究科博士後期課程。現在、黒川古文化研究所研究助手）がおこなった。なお、トヅカ古墳出土遺物は出土後すぐ、1876 年には京都府博物館に受け入れられたことがわかっているが、ヒスイ製勾玉を含む各種玉類[1)]については、1897 年（明治 30）に開館した帝国京都博物館（現在の京都国立博物館）に引き継がれる以前に散逸したものと考えられており（片岡 1991）、今回も所在を確認することはできなかった[2)]。（諫早直人）

２．　銅鏡

（１）概要

トヅカ古墳からは、同型鏡群２面（神人車馬画像鏡・神人歌舞画像鏡）と後期倭鏡１面（旋回式獣像鏡）、計３面の銅鏡が出土している。同型鏡群については川西宏幸と辻田淳一郎によって詳細な研究がなされており、本稿でも大いに参照した（川西 2004、辻田 2018）。同型鏡群は全く同じ紋様をもつ鏡が複数存在するという資料の特性上、トヅカ古墳出土鏡の銹で観察が難しい範囲は、状態の良い別の鏡から類推している部分も多い。後期倭鏡については主紋様から旋回式獣像鏡系と呼ばれる系列で、辻田と加藤一郎がトヅカ古墳出土鏡をとりあげているが、両者の間で見解が異なる（辻田 2018、加藤 2020）。以下では鏡の基本的な情報を提示し、近年の研究を参照しながら位置づけをおこなう。

（２）神人車馬画像鏡（図２、写真 1-1・2・7）

現状　完形品。肉眼では亀裂等を観察できない。後述するように鏡面と鈕の一部に、織組織の異なる複数の織物が付着している。赤色顔料等は確認できない。黄色がかったにぶい白銀色の地金がみえる。鏡背全体を暗緑色の銹が覆い、一部に青銹がみえる。

法量　面径 22.5cm、重量 1608g である。内区の厚さは２㎜～５㎜、外区の厚さは３～10mm である。反りは 3mm である。

紋様・形態　高く突出する鈕である。鈕孔は西王母と東王父の方向に空けられるが、反時計回りに少しずれている。鈕孔は不整形で、孔の内部で下辺が突出する。鈕座は断面が蒲鉾形の突帯に、密な有節重弧紋をほどこす。

内区は４つの乳で区画し、それぞれの区画に西王母、東王父、車馬、騎馬を配す。西王母と東王父は対置する。乳は山高の乳で、幅広の段をもち、周りに連珠紋がめぐる。

西王母の頭は髷を結い垂飾が下がる。両手を袖に隠し、余った袂は足元まで伸びる。衣装の裾は左右に大きく広がる。西王母の左右に２人ずつ侍女を伴う。東王父は通天冠を被る。左手を上げるように表現し、裾は西王母ほど広がらない。仙人と脇侍を２人ずつ伴い、右側の脇侍

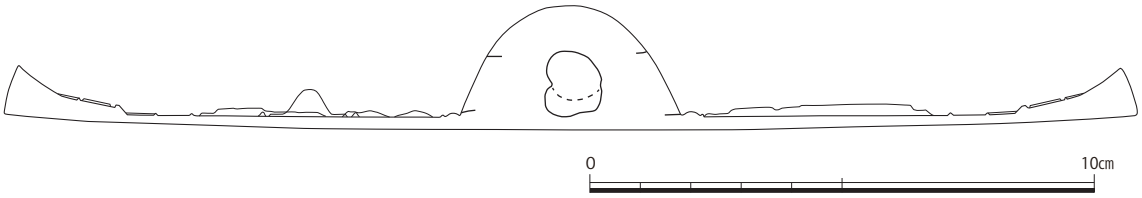


図２　トヅカ古墳出土神人車馬画像鏡（S ＝ 2/3）

は東王父に向かって扇を掲げる。車馬は上段に２頭立て、下段に３頭立てのものが左右に行き違う。２頭立ての車馬は２人乗りで、乗車する人は剣のような武器をかかげる。３頭立ての車馬は覆屋をもち、御者が操る。騎馬は上に２騎、下に４騎駆ける。３騎は人が乗り、３騎は空馬であって、長距離を移動する際の乗換用の馬とされる。上段右端の騎手は前方へ大きく身を乗り出し、武器を用いて鳥を狩ろうとしている。下段の騎手は腰に弓矢等の武器を携える。

内区外周は内側から銘帯と櫛歯紋がめぐる。銘文は「成氏作鏡四夷、多賀国家人民息。胡虜殄威天下復。風雨時節五穀孰。長保二親得天力。傳告後世楽無亟。乗雲駆馳、参駕四馬、道従

羣神、宜孫子公。」と記す（「中国古鏡の研究」班 2011-722）。東王父の位置から時計回りにめぐる。

外区は１段上がるが、内区との差は小さい。外区の内側はその他の同型鏡から動物紋を配すとわかるが、本鏡は銹や鋳造不良で確認できない。動物紋の間に置かれた巻雲紋がわずかに確認できる。動物紋の外側に細かな鋸歯紋がめぐる。縁の上面はわずかに反る。

鋳造・研磨　同型鏡は鋳造不良の目立つ製品が存在するが、本鏡は内区の図像など比較的細部まで鋳出されている。川西によって傷ａ～ｉが抽出されており（川西 2004）、本鏡の場合、東王父のすぐ右側（傷ｂ）と西王母の左側の乳を縦断する皺状の傷（傷ｈ）、西王母の右下の銘帯と櫛歯紋帯の崩れ（傷ｅ）などの鋳造不良が存在する。外区の動物紋は銹で観察できないがもともとあまり鋳出されていなかったようである。縁の一部に湯回り不良による窪みがある。

後世におこなわれたと考えられる激しい研磨痕がある。特に鏡面、銘帯、前述の縁の鋳造不良部分を集中しておこなったようである。

位置づけ　原鏡は漢鏡７期に相当する。上野祥史による画像鏡の分類では呉郡系、会稽郡・銭塘江系にあたり、江南地域に系譜が求められる（上野 2001）。鈕孔は辻田淳一郎の分類４にあたり、孔内にみえる突出は鈕孔の中子土の間に湯が流れ込んだ痕跡と推測される（辻田 2018）。

同型鏡　熊本県江田船山古墳　伝豊前国京都郡　計３面

（３）神人歌舞画像鏡（図３、写真 1-3・4・8）

現状　完形品にみえるが、亀裂がはしる位置の櫛歯紋は埋めを伴う補修がおこなわれている。後述するように鏡面全体と鏡背の一部に織組織の異なる複数の織物が重なり合って付着している。鈕孔内に紐のような有機質もみえる。鏡背は僅かに赤色顔料が付着する。にぶい白銀色の地金がみえる。全体を厚い緑銹が覆い、外区と銘帯に銹膨れがみえる。銘帯の一部に鉄銹が付着し、この部分は鉄器と接触していたと考えられる。

法量　面径 20.0cm、重量 1098g である。内区の厚さは 2mm ～ 6mm、外区の厚さは５～ 8mm である。反りは 3mm である。

紋様・形態　半球形の鈕で、幅広の段をもつ。鈕座は連弧紋がめぐる。鈕孔は西王母と東王父の方向に設けられるが、時計回りに乳の位置までずれている。鈕孔は半円形に近い。一方の孔の下辺が鏡体にえぐり込む。同型鏡のなかでは鈕孔が小さい。

内区は４つの乳で区画し、それぞれの区画に西王母、東王父、雑伎図を配す。西王母と東王父は対置する。乳は山高の乳で、四葉座をもつ。

前出の神人車馬画像鏡と比べて、西王母と東王父は意匠の差が少ない。本鏡では確認しがたいが、西王母左側の乳の上に「西王母」の傍題がある。西王母は装飾のある敷物に座る。西王母の前に２人の従者が控える。西王母の眼前に「玉女」の傍題があるが、同様にして確認できない。東王父の前に２人の従者がおり、１人は盤に載る杯のような器物を東王父に捧げ、後ろの人物は戟のような武器を携えている。右側の雑伎は右から縦笛を吹く人、逆立ちする人、鼓を打つ人を置く。左側の雑技は騎馬と左右に手を広げ踊る人を置く。

内区外周は断面が蒲鉾形の突帯に銘文をほどこし、外側に櫛歯紋がめぐる。銘文は「尚方作竟自有紀。辟去不羊宜古市。上有東王父西王母。令君陽遂多孫子兮。」（「中国古鏡の研究」班

図３　トヅカ古墳出土神人歌舞画像鏡（S ＝ 3/4）

2011-716）と記す。起句の前に珠紋を１つ置き、西王母の下から時計回りにめぐる。

外区は一段上がる。内側に鋸歯紋、外側に動物紋をほどこすが、本鏡は銹のため動物紋が観察できない。ほかの同型鏡は九尾狐や龍などの瑞獣を配す。

鋳造・研磨　川西によって傷ａ～ｃが抽出されているが、本鏡には存在しない。研磨は銹や付着物のため観察できない。

位置づけ　原鏡は漢鏡７期に相当する。上野の分類では尚方青盖系にあたり、華北地域に系譜が求められる（上野 2001）。鈕孔は辻田の分類１類にあたる（辻田 2018）。

同型鏡　伝埼玉県秋山古墳群　東京都亀塚古墳第２主体部　福井県西塚古墳　伝大阪府長持

山古墳　大阪府郡山西塚古墳　伝大阪府八尾市郡川　岡山県朱千駄古墳　福岡県番塚古墳　根津美術館蔵２面　出土地不明　計 12 面

（４）旋回式獣像鏡（図４、写真 1-5・6・9）

現状　　完形品。後述するように鏡面全体に織組織の異なる複数の織物が付着している。鏡背はわずかに赤色顔料が付く。くすんだ漆黒色の地金がみえるが、この色は銹に起因すると考えられる。全体を褐色がかった暗緑色の銹が覆う。

法量　　面径 16.1cm、重量 567g である。内区の厚さは 2mm ～ 7mm、外区の厚さは３～ 6mm である。反りは 3mm である。

紋様・形態　　低くなだらかな鈕で、段をもたない。鈕座は突線がめぐる。鈕孔は正方形に近い。

内区は神像のような図像１体と獣像４体で構成される。乳をもたない。神像のような図像は台形の体躯をもち、上部から下部につれて浮彫の隆起が高くなる。体躯の全体に格子状の紋様をほどこす。中段の左右には腕や気に由来する小突起が、下部の左右には膝に由来する半円形がつく。獣像は胸の位置に高く突出するフジツボ状の特徴的な節をもつ。S 字状の体躯をもち、首と後脚は細く小さく表現される。口の表現を欠く。４体とも同じ表現だが、神像左側の１体のみ前脚がつく。残りの空間には弧紋や渦紋を充填する。

内区外周は内側から外側へ順に擬銘帯、櫛歯紋帯、半円方形帯がめぐる。擬銘帯は I、t、f 字状の記号を配す。櫛歯紋帯は場所によって粗密に差がある。半円方形帯は半円と方形を交互に置き、間は珠紋を充填する。半円は弧紋、方形は十字紋をほどこす。一般的な旋回式獣像鏡は半円方形帯をもたない。

外区は一段上がり、中央に紋様帯がめぐる。画紋帯神獣鏡の外区に由来すると考えられるが、外側は突線で区画するのみで明瞭な凹帯とはならない。C 字形の巻雲紋を２列配すが、２ヶ所のみ構成を変える部分がある。縁の端面がわずかに膨らむ。

鋳造・研磨　　縁端は非常に鋭利で、細部までよく鋳出されている。鈕は回転削りによる研磨がおこなわれているが、内区と外区はほぼ鋳放ちの状態に近いと考えられる。鋳造にともなう傷や崩れは観察できない。

位置づけ　　加藤は旋回式獣像鏡系に含めていないが、関係の深い鏡として、加藤が分類するⅡ段階に相当し TK23 型式期の年代を想定する（加藤 2020）。辻田は古段階の旋回式獣像鏡系を原鏡に復古された鏡とみて、TK47 末～ MT15・TK10 型式期の年代を想定する（辻田 2018）。岩本崇は主像の表現を重視し、岩本が分類する３段階に相当し TK47 型式期を想定する（岩本 2018）。

（５）小結

以上、トヅカ古墳出土鏡の基礎的な情報を提示した。同型鏡群の図像学的検討は省略したが、林巳奈夫の考証を受けて川西が詳細を述べている（林 1989、川西 2004）。

トヅカ古墳出土鏡の意義　　これまで指摘されてきたように、同型鏡群は中国南朝から招来し、当時の倭王権が配布した鏡と考えられている。本鏡もそのうちの２面であり、倭王権とトヅカ古墳の被葬者の紐帯を示していると考える。同型鏡を２面以上副葬する古墳は稀であり、熊本県江田船山古墳や福岡県勝浦峯ノ畑古墳などが挙げられる。いずれも各地の有力な古墳であり、

図４　トヅカ古墳出土旋回式獣像鏡（S ＝ 3/4）

トヅカ古墳もこれらに比肩するだろう。また、面径が 16cm を超す旋回式獣像鏡も後期倭鏡のなかでは非常に大型の鏡である。古墳時代中期後半から古墳時代後期前半は同型鏡群と大型倭鏡を頂点とする鏡の格差が想定されており（辻田 2018 など）、両種の鏡を副葬するトヅカ古墳の被葬者はかなりの高位であったことが想定できる。

近年の研究動向　　主に辻田と加藤の研究に注目したが、それ以外の動向にも触れておきたい。同型鏡群については初村武寛が三次元計測を用いた検討を進めている。共有傷が大幅に追加されることで、これまで２～３世代程度でしかとらえられてこなかった同型鏡が、より世代が増す可能性も示されている（初村 2018・2020）。トヅカ古墳出土の神人歌舞画像鏡は同型鏡が 12 面存在するが、これは同型鏡群の中で２番目に多い面数であり、本鏡群も複数世代にわたる可能性があろう。

旋回式獣像鏡は近年の研究を参照し位置づけをおこなったが、評価が定まっていない点も存在する。旋回式獣像鏡に対する辻田と加藤の見解の違いは、後期倭鏡生産全体に通ずるもので、大型倭鏡（とくに交互式神獣鏡）の製作時期の差へと発展する。503 年説で固まりつつ

ある「癸未年」銘で著名な隅田八幡鏡が、須恵器編年のどの段階に位置づけられるかにも波及し、年代観の齟齬がある。こうした状況において、岩本の研究は両者の隔絶を解消しうるものとして注目されている（加藤 2020）。このように近年、後期倭鏡と同型鏡群の研究は活況を呈しており、近い未来に本論で紹介した銅鏡３面の評価が変わる可能性も十分にある。研究が今まさに進行している最中であり、今後も研究動向を注視する必要がある。一方で、トヅカ古墳の同型鏡２面と大型倭鏡１面の組み合わせが傑出していることは揺らぎなく、被葬者の身分の高さを表象する器物の一つであるといえよう。（馬渕一輝）

（６）付着繊維について（写真５）

いずれの銅鏡も鏡面側を中心に織組織の異なる複数の織物が付着していることが肉眼観察で確認できたため、京都国立博物館の降幡順子氏の協力を得て、顕微鏡写真の撮影を実施した。まず神人車馬画像鏡は最も良好に遺存する鏡背側、鈕部分をみると、鏡に接して織組織が疎らで凹凸の少ない平織物が（写真 5-1 上半）、その上面に織組織が密で凹凸をもつ平織物が付着している（写真 5-1 下半）。前者の糸は撚りをもたないことから絹織物とみられる。経糸（写真では横方向に延びる）が２本ずつ引き寄せられていることから、筬目の平絹とみてよいだろう。後者についても密な織組織から平絹と判断される。

神人歌舞画像鏡については、鏡面側に織物が良好に遺存している。やはり鏡に接して筬目の平絹が（写真 5-2 上半）、その上面に平絹が付着している（写真 5-2 下半）。写真 5-3 は写真 5-2 の、写真 5-5 は写真 5-4 をさらに拡大したもので、糸が撚りをもたないことや織組織から前者は筬目の平絹、後者は平絹であることがよくわかる。写真 5-5 をみると平絹の下にさらに平絹がのぞいており、平絹は少なくとも一部は二重構造であったとみられる。

旋回式獣像鏡も鏡面側に織物が良好に遺存している。やはり鏡に接して筬目の平絹（写真 5-8）が、その上面に平絹（写真 5-7）が付着している（写真 5-6）。写真 5-7 は写真 5-6 を拡大したもので、写真 5-8 はそれらとは異なる位置を拡大したものであるが、糸が撚りをもたないことや織組織から前者は平絹、後者は筬目の平絹であることがよくわかる。

以上を整理すると、いずれの銅鏡も鏡に接して筬目の平絹、その上に一枚ないし二枚の平絹が付着する点で共通する。織耳と特定できる部分が確認できていないため、複数枚の織物で包んだ可能性と、袋の表地（平絹）と裏地（筬目の平絹）にあたる可能性の二つが考えられるが、どちらにせよ３面とも同じような素材、同じような副葬方法であったとみてよいだろう。

３．　馬具

（１）概要

鉄地金銅張 f 字形鏡板轡１、鉄製楕円形鏡板１、鉄地金銅張剣菱形杏葉１、いわゆる鉄地金銅張花弁形杏葉１とそれに伴う鉄地金銅張方形吊金具２、鉄環１を確認した（傍線は『京都国立博物館蔵品目録』（京都国立博物館 1966）に記載されていない資料）（図５、写真２・３・５・６）。

（２）轡

１は鉄地金銅張 f 字形鏡板で欠損部が多いもののおおよそのかたちを把握することができる。鏡板本体は中央部の高さ 5.6cm、残存長は 11.1cm である。鉄製地板に金銅板を一枚被せした

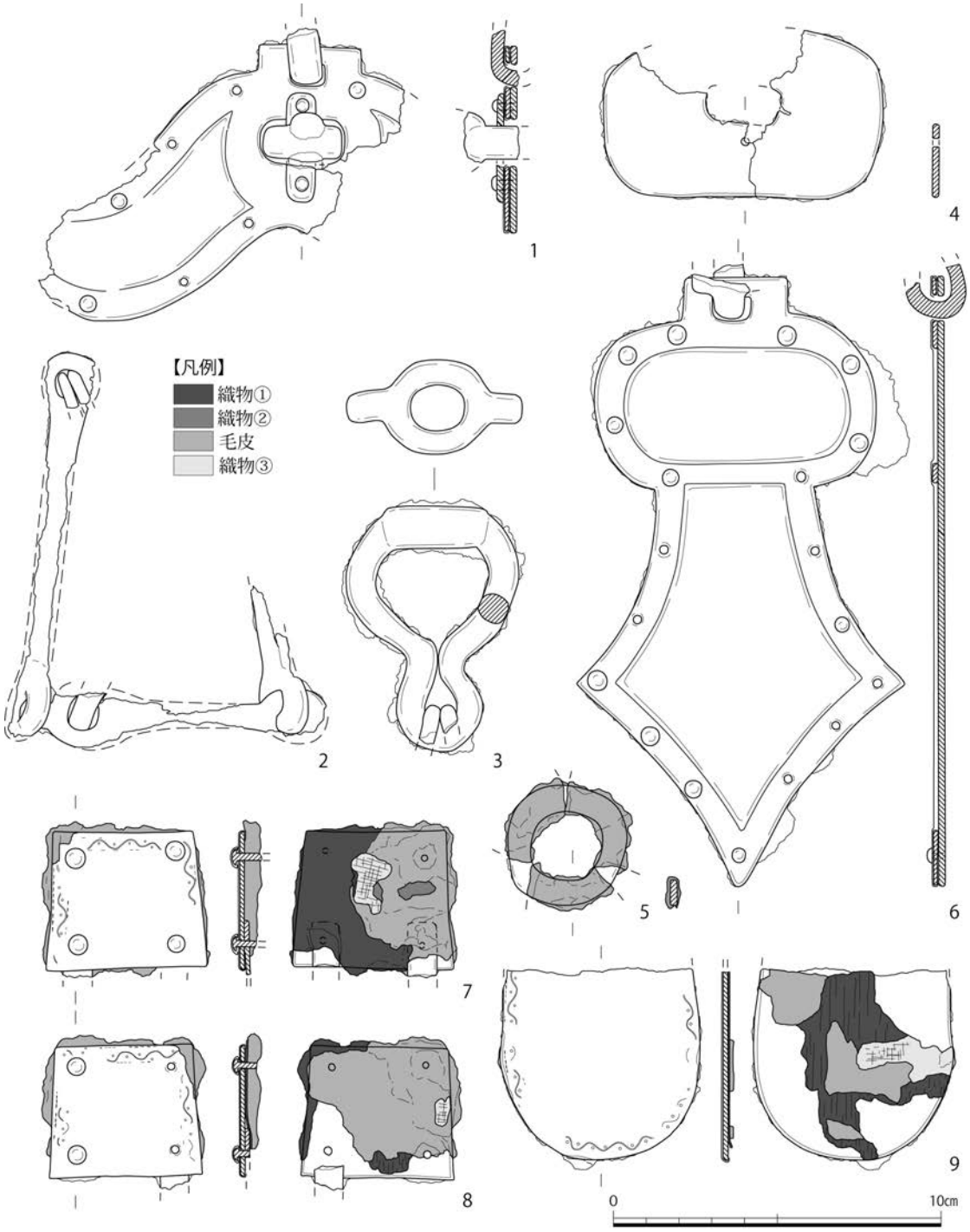


図５　トヅカ古墳出土馬具（S ＝ 1/2）

鉄製の縁金をのせ、直径 5mm、高さ 1.5mm ほどの円頭鋲を 2.5 ～ 3.0cm 間隔に打って固定する。地板、縁金、ともに厚さ 2mm ほどである。鋲は頭部に銀板を被せた鉄地銀被鋲のようにみえる。鏡板中央には幅 2.6cm、高さ 1.3cm、隅丸長方形の銜孔を設け、長さ 3.3cm、幅 0.9cm の鉄製銜留金具を縦方向に鋲留する。鏡板中央上方には幅 3.2cm、高さ 0.8cm の立聞部があり、中央に幅 1.1cm、高さ 0.7cm の立聞孔を設ける。立聞孔には鉄製吊金具の棒状鉤部が銹着しているが上半部は欠損している。銜孔には銜外環片が銹着しており、固定式遊環をもつ構造であったことがわかる。

2・3は鉄製の銜・引手片である。引手と引手壺を兵庫鎖で連結する特徴から、両者は同じ轡を構成するとみられる。また、2の銜が固定式遊環をもつことから、これらの銜・引手片は1の鉄地金銅張f字形鏡板と同じ轡を構成すると判断した。2は腐食による劣化が激しく、各部位の正確な計測は困難である。銜は2連式とみられ、ほぼ遺存する左側で残存長9.3cmである。左側の銜外環には鉄製の銜留金具が銹着しており、1と対になる鏡板に伴うものとみられる。固定式遊環を介して、引手と連結している。引手は残存長11.8cmで引手外環には兵庫鎖が銹着している。3は完形の瓢形引手壺で、遺存状態も良好である。厚さ0.8cmの鉄棒を瓢形に折り曲げてつくっており、長さ7.5cm、最大幅5.3cmである。上方には手綱を通すための直径2.9cmの円環部をつくっている。下方には兵庫鎖が銹着している。

4は鉄製楕円形鏡板片で、立聞部側が欠損している。幅8.5cm、残存高5.2cmで、厚さ2mmほどの鉄板でつくられている。鏡板中央には幅2.3cm、高さ1.2cm、隅丸長方形の銜孔を設け、銜留金具を縦方向に鋲留したものとみられる。鏡板下辺はわずかに内彎するが明瞭な抉りはもたない。

（3）杏葉

6は鉄地金銅張剣菱形杏葉である。杏葉本体は完形で全長18.6cm、最大幅10.0cmである。鉄製地板に金銅板を一枚被せした鉄製の縁金をのせ、直径5～6mm、高さ1.5mmほどの鉄地銀被円頭鋲を2～3cm間隔に計19ヶ所に打って固定する。地板、縁金、ともに厚さ2mmほどである。縁金は扁円部と剣先部の間に区画帯を設けている。扁円部中央上方には幅3.2cm、高さ1.1cmの立聞部があり、中央に幅1.2cm、高さ0.8cmの立聞孔を設ける。立聞孔には鉄製吊金具の棒状鉤部が銹着しているが、上半部は欠損している。

7～9はいわゆる鉄地金銅張花弁形杏葉とそれに伴う鉄地金銅張方形吊金具である。7・8は方形吊金具で吊金具本体の長さ4.1～4.3cm、幅は上辺4.2cm、下辺4.7～4.9cmで平面台形を呈する。厚さは1.5mm。鉄製地板に金銅板を張り、裏側に折り返して固定したとみられ、金銅板の周縁には、下辺を除いて波状列点文を彫金する。波状文にはなめくり技法が、列点文には点打ち技法が、波状列点文上下の圏線には蹴彫技法がそれぞれ用いられている（写真6-6）。蹴彫と蹴彫の間隔は広く空いている。なお、8の波状文を仔細に観察すると、なめくりの痕跡（写真6-7）とともに密な蹴彫の痕跡（写真6-8）が一部に認められる。両者は同じ場所に施文されていること、幅や打ち込みの深さがよく似ていることから、意図して使いわけたというよりは、同じタガネによる連続的な動作の中で生じたとみられる。吊金具の四隅には直径5～6mm、高さ2.0mmほどの鉄地銀被円頭鋲を打っている。上辺の2鋲の脚部は裏面に付着している有機質素材を貫通しているが、下辺の2鋲の脚は明確でなく、吊金具裏面に取り付けられた幅0.9cm、厚さ1.5mmの2本の鉤金具だけを鋲留していた可能性が高い。裏面には少なくとも4層構造の有機質が面的に付着していることを肉眼でも確認できる。すなわち、地板の上にまず織物①が付着しており、その上に織物②（写真6-2右側）、毛皮（写真6-1上半・2下半）、織物③の順に付着している（写真6-1下半）。各織物の糸はいずれも撚りをもたないことから、絹織物とみられる。織組織から織物②・③は平絹とみられ、織物①は経糸が複数の緯糸をまたいでいることから、経錦の可能性がある。毛皮は織物③直下に網状組織（写真6-3）が、織物①・②の直上に獣毛（写真6-2下半）が付着している傾向が認められることか

ら、表側（金具側）に毛皮の表面を向けていたとみられる。

９は杏葉本体で、上半部は欠損している。残存長 5.9cm、幅 6.0cm、厚さ 1.5mm である。鉄製地板に金銅板を張り、裏側に折り返して固定する。金銅板の周縁には、波状列点文を彫金しており、吊金具同様、波状文にはなめくり技法、列点文には点打ち技法が、波状列点文上下の圏線には蹴彫技法がそれぞれ用いられている。蹴彫と蹴彫の間隔は広く空いている。裏面には少なくとも３層構造の有機質が面的に付着していることを肉眼でも確認できる。地板の上にまず織物①が付着しており（写真 6-5 左側）、その上に毛皮（写真 6-4 下半）、さらにその上に織物③が付着している（写真 6-4 上半）。織物の糸はいずれも撚りをもたないことから、絹織物とみてよいだろう。織組織から織物②は平絹とみられ、織物①は経糸が複数の緯糸をまたいでおり、経錦の可能性がある（写真 6-5 左側）。吊金具（図 5-7）にみられた織物②については露出している範囲では確認できなかったが、おそらくは吊金具に付着している有機質と同じ４層構造であろう。

なお、花弁形杏葉という名が示す通り、本資料については胸繋に懸垂する杏葉とみる意見が一般的であるが（千賀 1976、濱岡 2003、西 2015 など）、本例の裏面には吊金具と杏葉本体にかけて同一構造の有機質が面的に付着していることは留意しておきたい[3)]。

（４）そのほか

５は完形の環状鉄製品で、直径 3.8cm である。幅 0.7 ～ 0.8cm、厚さ 2mm、断面長方形の鉄棒を折り曲げて鍛接してつくったとみられる。皮革と思しき幅 2.5 ～ 3.0cm の帯状有機質が３ヶ所、表裏面に付着しており、それぞれ皮革製のベルトを折り返した痕跡であろう。面繋などの繋結束具の可能性が高い。

（５）小結

まずはセット関係について整理しておきたい。上述の馬具の中で、ｆ字形鏡板轡、剣菱形杏葉、花形杏葉はいずれも鉄地金銅張で、ほぼ同一形状の鉄地銀被円頭鋲を採用していることからみて、当初よりセットとして製作された可能性が高い。副葬馬具の全体像を知ることはできないものの、トヅカ古墳にはこれらを中心とする A セットと、鉄製楕円形鏡板を含む B セット、２セット分の馬具が副葬されていたとみてよいだろう。

次に編年研究が進んでいるｆ字形鏡板轡や剣菱形杏葉を中心に、その時間的位置づけについて簡単に整理しておきたい。両者は内山敏行（1996）の中期第５段階、陶邑編年で言うところの TK208 型式期以降、長期にわたって製作された古墳時代を代表する装飾馬具である。トヅカ古墳のｆ字形鏡板轡・剣菱形杏葉に共通して認められる金銅板一枚被せ技法については中期第７段階（TK47 型式期）に出現したことが明らかとなっており（宮代 1993、内山 1996、片山 2020）、ひとまずこれを A セットの製作の上限年代とすることができる。では下限年代はどうだろうか。剣菱形杏葉は外形線からみて田中由理のⅠ B2 式に該当し、６世紀中葉までの古墳から幅広く出土しているのに対し（田中 2005）、ｆ字形鏡板は欠損部分が多いものの外形線から最初期に出現した型式の一つとされる田中由理のⅠ B 式に該当するとみられ、類例は５世紀後葉から末の古墳に限定される（田中 2004）。また花弁形杏葉は濱岡大輔によって奈良県石光山８号墳、福井県十善の森古墳出土例とともに最初期（氏のⅠ段階：５世紀末～６世紀初）に位置づけられている（濱岡 2003）。これも中期第７段階を製作の上限年代とみ

てよいだろう。鉄製楕円形鏡板は、下辺が緩やかに内彎する花谷浩のⅠ型式に該当し（花谷1991）、鈴木一有によれば中期中葉～後葉を中心に類例が出土している（鈴木 2002）。鏡板のみの出土であり製作年代を細かく絞り込むことは難しいが、A セットとおよそ同時期のものとみてよさそうである。

トヅカ古墳出土馬具の時期をめぐっては、TK23 型式期とする見解と（古川 2010）、TK47 ～ MT15 型式期とする見解にわかれているが（桃﨑 2015）、ここまでの検討をふまえれば、とりわけ A セットの製作年代については、内山敏行編年の中期第 7 段階、すなわち中期末葉（TK47 型式期）に限定して考えて大過ないだろう。

4.　刀剣

（1）概要

刀剣とみられる鉄片は 16 点保管されている。これらのうち、外形の遺存する 6 点（うち 2 点は接合）の破片を図化した（図 6 、写真 4 ）。1 ～ 4 は剣の破片、 5 は刀の破片である。剣身部の幅からみて、 1 と 2 ～ 4 は別固体と判断され、最少個体数で鉄剣 2 振（うち 1 振は鹿角装）、鉄刀 1 振の存在を確認できる。

（2）鉄剣

1 は剣身部分から茎部分にかけての破片で、切先、茎尻ともに欠損している。残存長 11.5cm（剣身部 6.9cm、茎部 4.6cm）である。剣身部は最大幅 3.8cm、厚さ 0.8cm で、刃部断面はレンズ状を呈し、鎬はつくらない。関部は直角関で深さ 0.3cm と極めて浅く切れ込む池淵俊一の「浅直関」に、茎部は厚さ 0.4cm、断面長方形で、幅 3.2cm の関部付近から茎尻に向かって直線的に幅を狭めていく「中細茎」にそれぞれ該当する（池淵 1993）。茎下端の

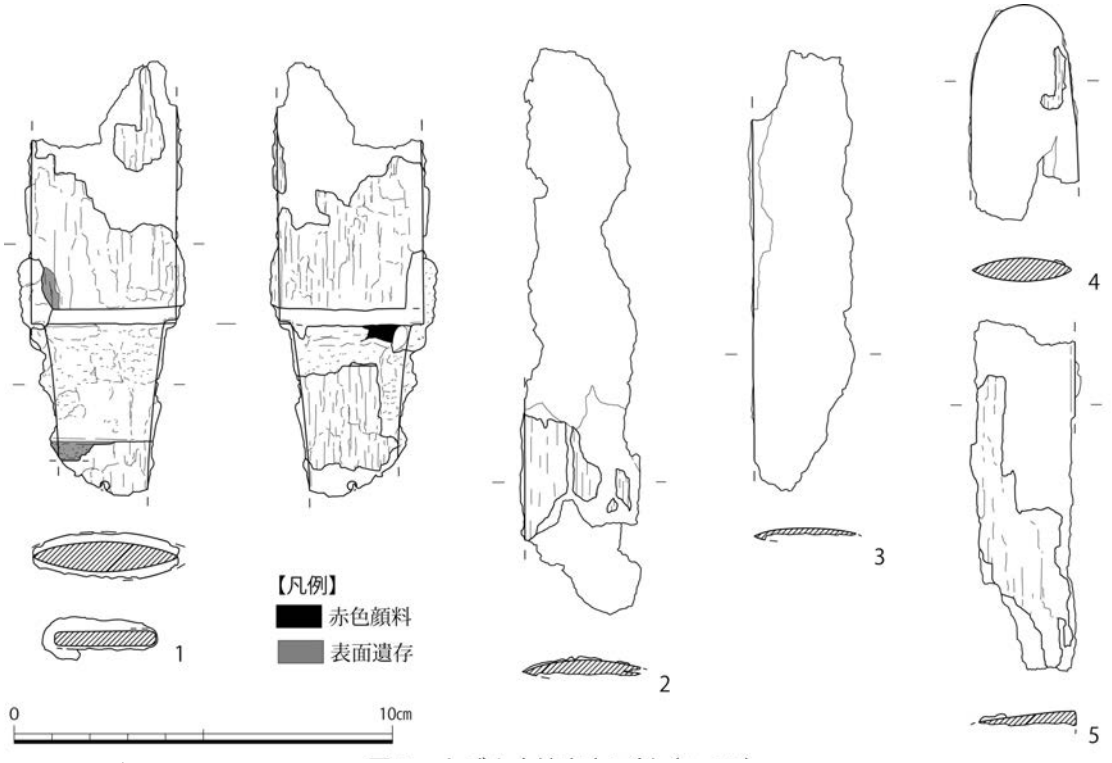


図 6　トヅカ古墳出土刀剣（S ＝ 1/2）

折損部には、径 0.3cm の目釘孔が確認できる。

剣身部表面には鞘間材とみられる剣身主軸に並行する木質が付着している。鞘間材とみられる木質の端部は、関部より 0.4cm 上方で表裏面ともに直線的に途切れており、関部にまでは及ばない。また鞘口付近、関部から剣身部方向へ 1.7cm、茎部方向へ 0.7cm の範囲には、鹿角製の鞘口装具の痕跡とみられる多孔質乳白色の有機質が付着している。この有機質の下にまで上述の木質が及んでいることから２材からなるであろう鞘間材の鞘口側を鞘口装具にはめ込んで固定していたことがわかる。鞘口装具とみられる有機質の範囲は茎部側にも一部およんでおり、以下に述べる把縁装具とみられる有機質の上に重なっていることから、鞘口装具は把縁装具の鏥を覆っていたとみられる。

次に茎部表面をみる。関部から茎部方向へ 3.6cm の範囲に鹿角製の把縁装具とみられる多孔質乳白色の有機質が（写真４顕微鏡写真）、関部から茎部方向へ 1.1cm より下方には木製の把間の痕跡とみられる剣身主軸に並行する木質が付着している。把縁装具は欠損が著しく全形の把握が困難であるが、表面の遺存する部分を手掛かりにすると、鏥をもつこと、下端を帯状に区画していること、赤色顔料を塗布していることなどがわかる。鹿角製の把縁装具の下にまで把間の木質が及んでおり、把間材は目釘と、把縁側を把縁装具にはめ込むことによって固定していたことがわかる。なお把縁装具に塗布された赤色顔料については蛍光 X 線分析の結果、水銀が顕著に検出されたため、水銀朱とみられる。

２・３は剣身部分の破片で前者が残存長 14.9cm、残存幅 3.0cm、後者が残存長 11.6cm、残存幅 2.7cm である。いずれも刃部断面はレンズ状を呈し、鎬はつくらない。２の表面には鞘間材とみられる剣身主軸に並行する木質が付着している。３は現状、２点にわかれており、接合する。４は切先部分の破片で残存長 5.2cm、幅 2.8cm、厚さ 0.6cm である。ふくら切先で、刃部断面はレンズ状を呈し、鎬はつくらない。表面には鞘間材とみられる剣身主軸に並行する木質が付着している。

（３）鉄刀

５は刀身部分の破片である。残存長 11.6cm、残存幅 2.7cm で、表面には鞘間材とみられる刀身主軸に並行する木質が付着している。

（４）小結

何れも破片資料であり、積極的な位置づけは困難である。ただし鹿角製装具をもつ１については装具の全形を知ることはできないものの、把縁装具と把間が別素材であることからみて、岩本崇の有段有突起型 B2 類に該当する可能性が高い。岩本によれば有段有突起型 B2 類は古墳出土鉄剣の中でも最も新しく位置づけられ、古墳時代中期中葉頃に出現し、後期前半まで存続したものとみられる（岩本 2006）。

５．　おわりに

トヅカ古墳についてはかねてより、前方後円墳集成編年８期（TK23・47 型式期）に位置づけられ、飯岡車塚古墳を嚆矢とする飯岡古墳群最後の首長墓と目されてきた（和田 1992）。円墳で、埋葬施設や埴輪などの外表施設の情報が乏しいトヅカ古墳の場合、年代比定の根拠となってきたのは銅鏡や馬具などの副葬品である。とりわけ銅鏡については近年もたびたび研究

の俎上に載せられてきたが、馬具などの鉄製品を含めた副葬品全体については十分な検討がされてこなかった。

本論では、京都国立博物館に保管されている副葬品の基礎情報を提示した上で、個々の資料の年代的位置づけについて整理をおこなった。結果として、銅鏡については旋回式獣像鏡の製作年代をめぐって研究者の見解が一致をみておらず、議論の推移を見守る必要があるものの、馬具に関しては古墳時代中期末（TK47 型式期）に製作年代を絞り込めることを確認した。あくまで馬具の製作年代であり、銅鏡の製作年代やトヅカ古墳の築造年代と直ちに結びつくわけではないが、竪穴式石室から出土したことをふまえれば、後者の上限年代の一つとみなすことは可能であろう。本論が今後、トヅカ古墳を考える際の基礎資料として活用されることを願う。

（諫早）

謝辞

本調査の実施や成果の公表にあたっては、京都国立博物館および同館の宮川禎一氏、古谷毅氏、降幡順子氏の格別のご高配を得た。とりわけ降幡順子氏には顕微鏡写真や透過 X 線の撮影、蛍光 X 線分析をしていただき、その成果の一部を本稿に掲載させていただいた。また 2020 年 12 月 21 日に同館のご厚意で有識者による遺物検討会を実施し、奥山誠義氏（奈良県立橿原考古学研究所）、金宇大氏（滋賀県立大学）、片山健太郎氏（奈良文化財研究所）、大屋篤史氏（京田辺市市史編さん室）、上野あさひ氏、吉兼千陽氏（以上、京田辺市文化・スポーツ振興課）より大変有益なご教示を得た。ここに記して感謝の意を表したい。

註

1）ヒスイ製（硬玉製）勾玉 2 個のほかに管玉・小玉 20 数点が出土しているようであるが、正確な数量はわからない（片岡 1991）。梅原末治の聞き取り調査によれば、「金の勾玉で、頭部に七宝飾を加へた珍奇なもの」もあったとのことである（梅原 1938）。

2）『京都国立博物館蔵品目録』（京都国立博物館 1966）に挙げられているトヅカ古墳出土品一括（J 甲 31）は、下記の通りである。

（1）神人車馬画像鏡　1　径　22.2　（2）神人歌舞画像鏡　1　径　19.7　（3）変形半円方帯神獣画像鏡　1　径　16.1　（4）金銅杏葉（剣菱形）　1　長　18.5　（5）轡鏡板　1　（6）銜　1　（7）金銅方形金物　2　（8）鉄直刀身片　3

3）奈良県上 5 号墳出土花弁形杏葉でも同様の事例が確認されており、皮革を芯とし、経錦と筬目平絹を重ねて包み込んだものを何らかの接着剤で金具に付けたと推測されている（吉松 2003）。

参考文献

池淵俊一 1993「鉄製武器に関する一考察」『古代文化研究』第 1 号　島根県古代文化センター

岩井武俊 1905「山城国相楽綴喜両郡の古墳」『考古界』第 5 篇第 1 号　考古学会

岩本崇 2006「古墳出土鉄剣の外装とその変遷」『考古学雑誌』第 90 巻第 4 号　日本考古学会

岩本崇 2018「旋回式獣像鏡系倭鏡の編年と生産の画期」『古天神古墳の研究』島根大学法文学部考古学研究室・古天神古墳研究会

上野祥史 2001「画像鏡の系列と製作年代」『考古学雑誌』第 86 巻第 2 号　日本考古学会

内山敏行 1996「古墳時代の轡と杏葉の変遷」『'96 特別展 黄金に魅せられた倭人たち』島根県立八雲立つ風土記の丘資料館

梅原末治 1920「飯ノ岡ノ古墳」『京都府史蹟勝地調査会報告』第 2 冊　京都府

梅原末治 1938「山城飯岡トヅカ古墳」『近畿地方古墳墓の調査』日本古文化研究所

片岡肇 1991「京都府田辺町十塚古墳の発見と保存の経緯について」『朱雀』第 4 集　京都府京都文化博物館

片山健太郎 2020「古墳時代中期の馬具編年―中期後半を中心として―」『中期古墳研究の現状と課題Ⅳ』中国四国前方後円墳研究会

加藤一郎 2020『古墳時代後期倭鏡考　雄略朝から継体朝の鏡生産』六一書房（初出は加藤一郎 2014「後期倭鏡研究序説―旋回式獣像鏡系を中心に―」『古代文化』第 66 巻第 2 号、同 2016「滋賀県垣籠古墳出土鏡の位置づけと意義―旋回式獣像鏡系の再検討と公文書について―」『書陵部紀要』第 67 号〔陵墓篇〕宮内庁書陵部）

川西宏幸 2004『同型鏡とワカタケル　古墳時代国家論の再構築』同成社

京都国立博物館 1966『京都国立博物館蔵品目録』

鈴木一有 2002「経ヶ峰 1 号墳の再検討」『三河考古』第 15 号　三河考古刊行会

田中由理 2004「f 字形鏡板付轡の規格性とその背景」『考古学研究』第 51 巻第 2 号　考古学研究会

田中由理 2005「剣菱形杏葉と 6 世紀前葉の馬具生産」『待兼山考古学論集』大阪大学考古学研究室

千賀久 1976「8　石光山 8 号墳」『葛城・石光山古墳群』奈良県立橿原考古学研究所

「中国古鏡の研究」班 2011「後漢鏡銘集釋」『東方學報』京都第 86 冊　京都大学人文科学研究所

辻田淳一郎 2018『同型鏡と倭の五王の時代』同成社

西幸子 2015「山の神古墳出土形の検討―胸繋の可能性に注して―」『山の神古墳の研究』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室

初村武寛 2018「同型鏡群と大須二子山古墳」『錆情報に基づく戦後復興期消滅古墳副葬品配列の復元研究』元興寺文化財研究所

初村武寛 2020「3D データを用いた同型鏡群の比較検討 I ―いわゆる画文帯環状乳神獣鏡 AB と浮彫式獣帯鏡 AB について―」『元興寺文化財研究所研究報告 2019』元興寺文化財研究所

花谷浩 1991「3) 馬具」『川上・丸井古墳発掘調査報告書』長尾町教育委員会

濱岡大輔 2003「花弁形杏葉について」『上 5 号墳』奈良県立橿原考古学研究所

林巳奈夫 1989『漢代の神神』臨川書店

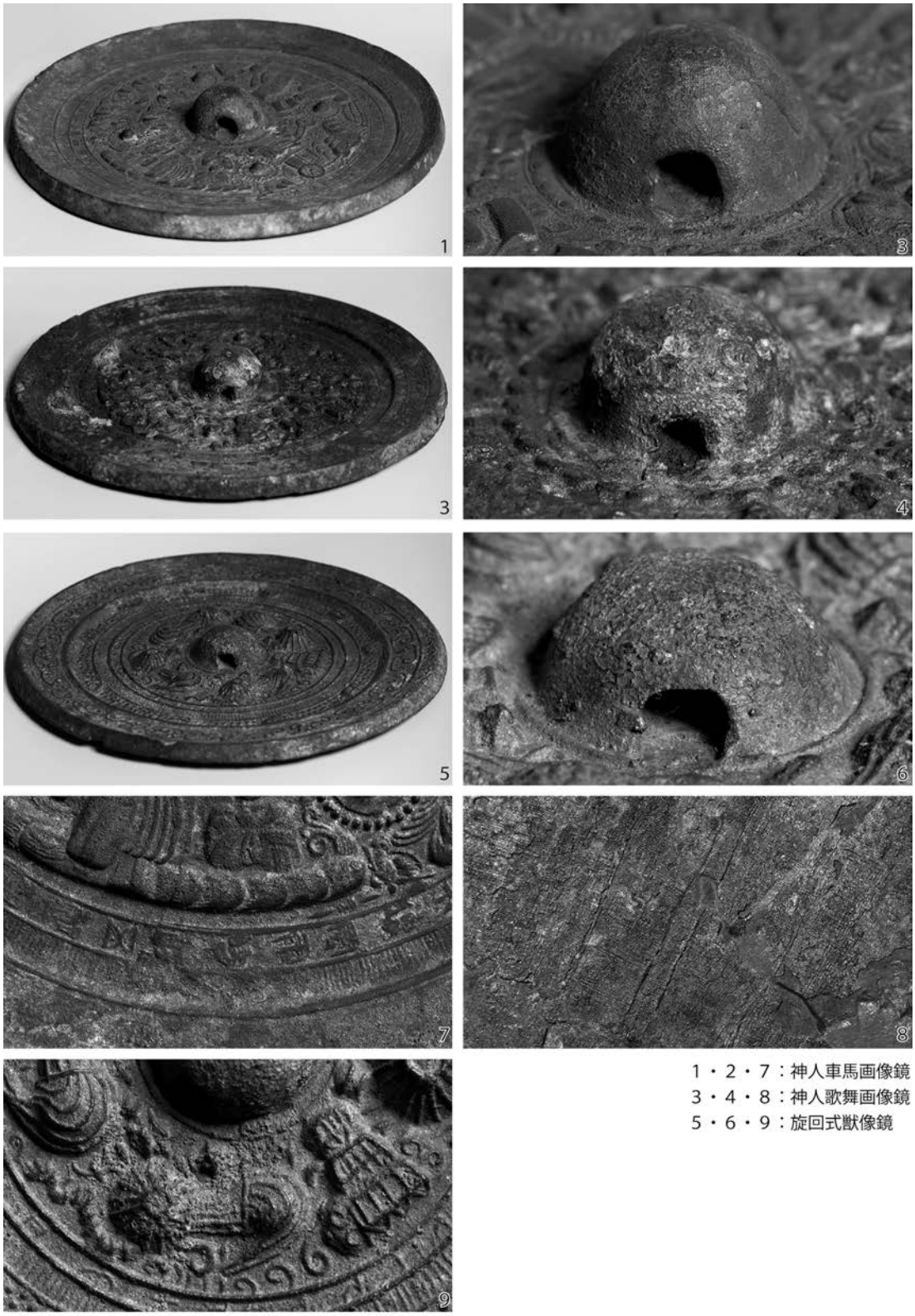
古川匠 2010「古墳時代後・終末期の装飾馬具と装飾付大刀における貴金属の使用について」『京都府埋蔵文化財論集』第 6 集　京都府埋蔵文化財調査研究センター

宮代栄一 1993「5・6 世紀における馬具の「セット」について―f 字形鏡板付轡・鉄製楕円形鏡板付轡・剣菱形杏葉を中心に―」『九州考古学』第 68 号　九州考古学会

桃﨑祐輔 2015「山の神古墳出土馬具の検討」『山の神古墳の研究』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室

吉松茂信 2003「上 5 号墳出土繊維について」『上 5 号墳』奈良県立橿原考古学研究所

和田晴吾 1992「第 4 章　山城」『前方後円墳集成　近畿篇』山川出版社



1・2・7：神人車馬画像鏡
3・4・8：神人歌舞画像鏡
5・6・9：旋回式獣像鏡

写真１　トヅカ古墳出土銅鏡細部

写真２　トヅカ古墳出土馬具（1）（番号は図５と対応）

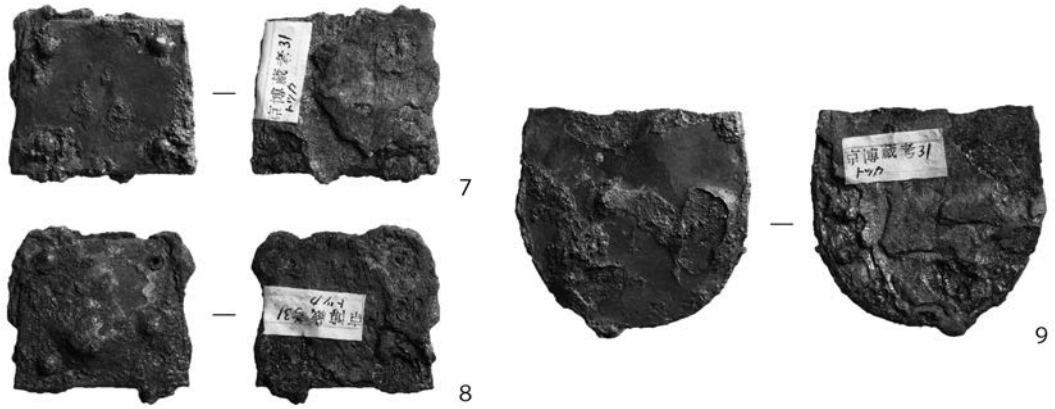


写真３　トヅカ古墳出土馬具（２）（番号は図５と対応）

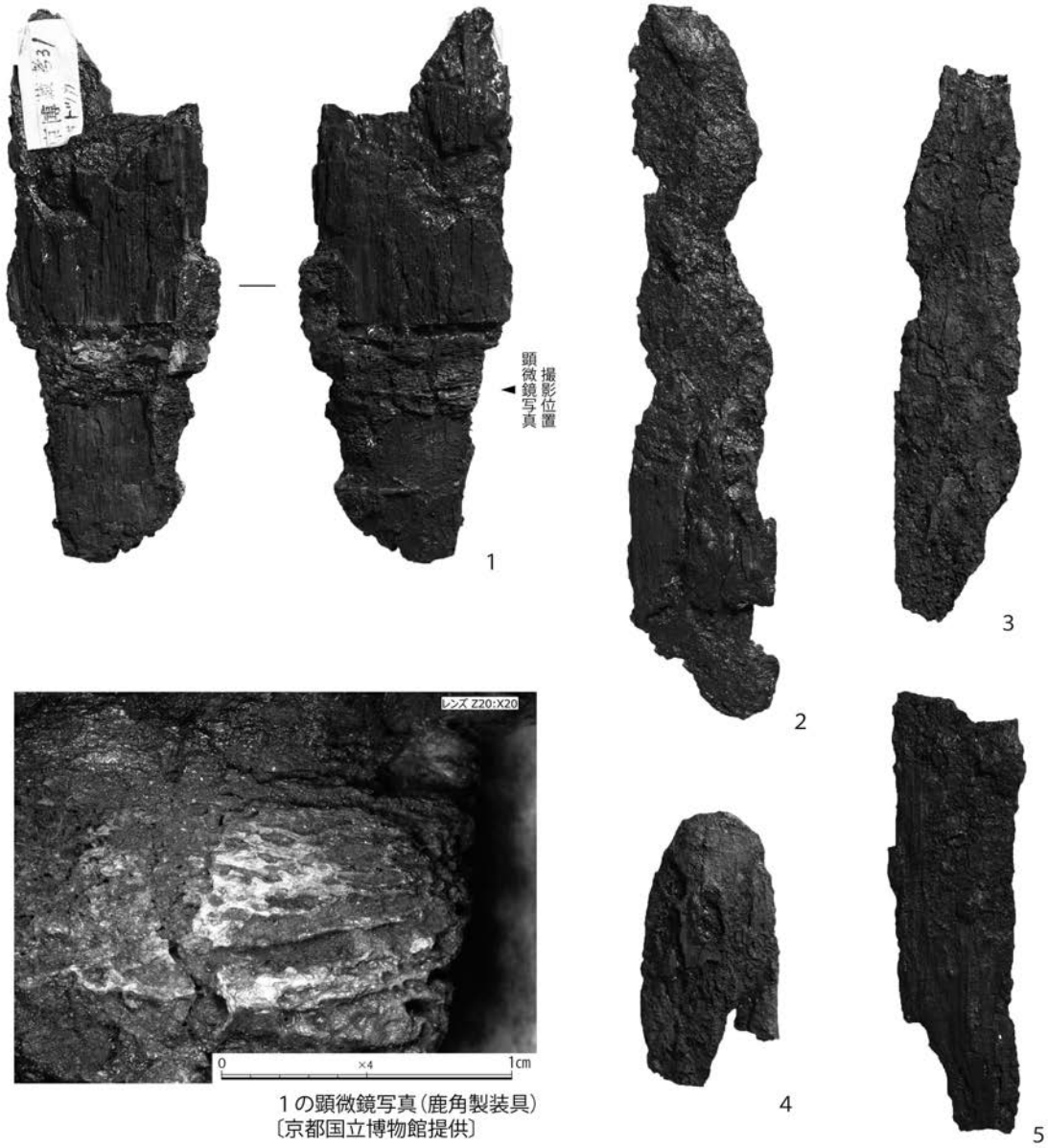


写真４　トヅカ古墳出土刀剣（番号は図６と対応）

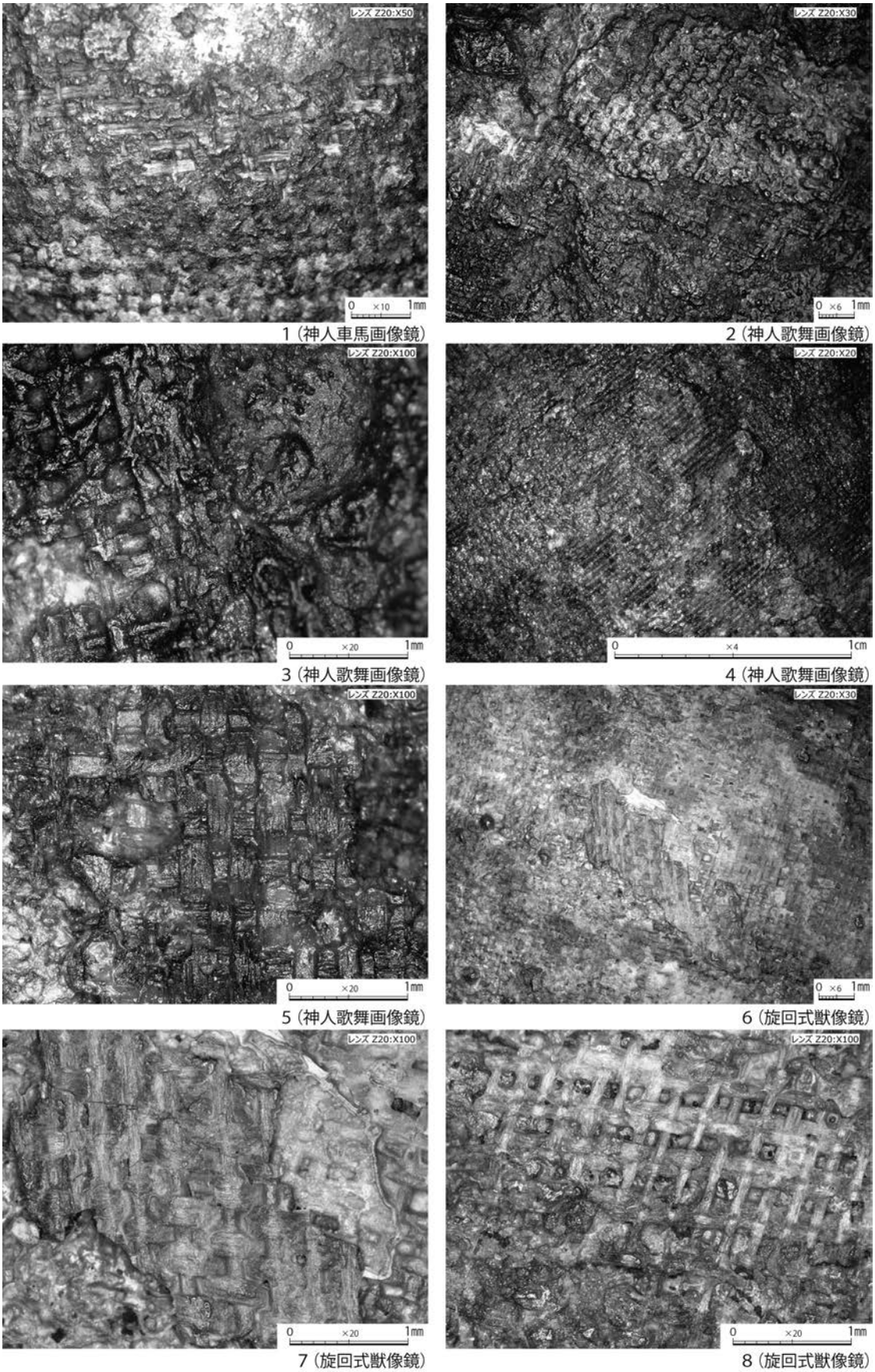


写真５　トヅカ古墳出土銅鏡顕微鏡写真（京都国立博物館提供）

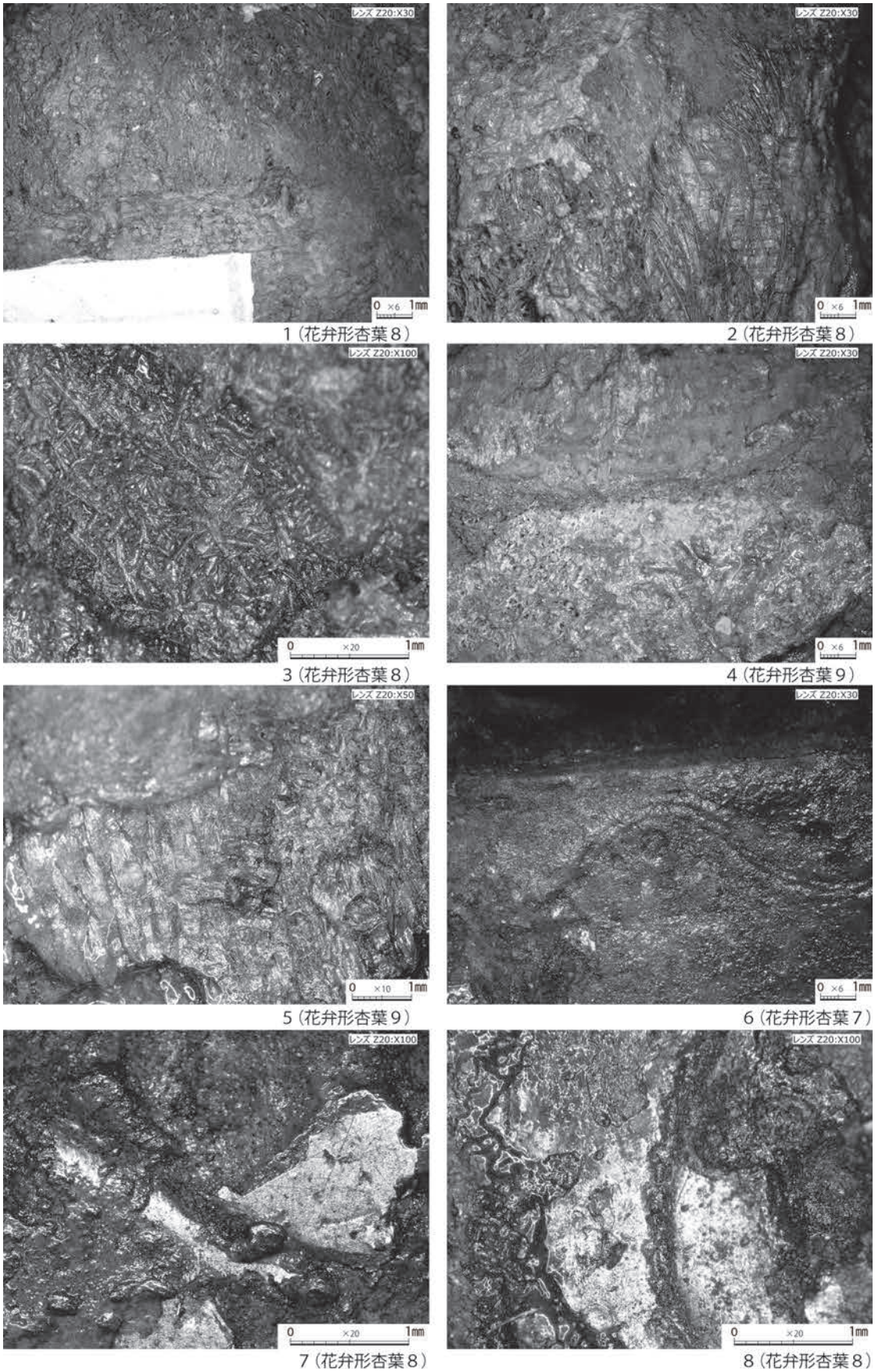


写真６　トヅカ古墳出土馬具顕微鏡写真（京都国立博物館提供）